

タイトル	強制移送からユダヤ人を救おうとした「作業部会」 ... カタリーナ・メシュコヴァ・フラツカ
著者	木村，和範； KIMURA, Kazunori
引用	季刊北海学園大学経済論集，70(4)：181-194
発行日	2023-03-31

《翻訳》

強制移送からユダヤ人を救おうとした「作業部会」⁽¹⁾

カタリーナ・メシュコヴァ・フラツカ*
木村和範** (訳)

ワーキング・グループ
「作業部会」(スロバキア語では Pracovní skupina, ドイツ語では Nebenregierung) とは、国の肝いりで設立されたユダヤ人センター(Ústredňa Židov: ÚŽ) 中の非合法組織であり、ユダヤ人が強制収容所に移送されたところに活動した、スロバキアにおける唯一のレジスタンス・グループと言ってもよかろう。その中心にいたのは、ユダヤ人センターの幹部である。超正統派からシオニスト、そしてリベラル派に至るまでの多様な考え方の人々が、スロバキアのユダヤ人コミュニティのために働くことを共通の目的として結集した。

このグループが誕生した正確な時期については諸説があるが、いずれにしても、強制移送が始まったところか、あるいはそれよりもっと前にユダヤ人センターの内部で迫り来る危機について議論が起こったところのことである。アルパード・セベスティエーン(Arpád Sebestyén) がユダヤ人センター事務局長に指名された直後の 1941 年 5 月に、自然発生的に「作業部会」が誕生したというのが、最も可能性が高いように思われる。ユダヤ人センターの幹部やユダヤ人問題ドイツ顧問官ディーター・ヴィスリチェニー(Dieter Wisliceny) にたいする従順な態度や卑屈な姿勢に反発した一部のメンバーの不满が募り、ユダヤ人センターから離反した少数の職員グループが強い推進力となって「作業部会」が結成された。彼らが結集したのは、このような状況であった。この「作業部会」は、当初は、公文書を偽造し、スロバキアからハンガリーへの逃亡を幫助して救済に当たった。ギジ・フライシュマン(Gizi Fleischmann) は、パレスチナ行きの「最後の」移民船ペンチョ

* Katarína Mešková Hradská, Institute of History of the Slovak Academy of Sciences. 原論文の書誌情報は以下のとおり。“Attempts of the ‘Working Group’ to Save Jews from Deportations,” in: Ján Hlavinka, Hana Kubátová, and Fedor Blaščák (ed.), *Uncovering the Shoah: Resistance of Jews and Efforts to Inform the World on Genocide (Proceedings from the Conference Žilina, Slovakia, 25–26 August 2015)*, pp. 78–87. ジリナにおけるこの研究会の主催団体は International Christian Embassy Jerusalem と Institute of History of Slovak Academy of Sciences であり、研究会の開催と論文集の刊行には Conference on the Jewish Material Claims to Germany からの助成を受けた。訳者の照会により原論文にたいして追加された説明で長いものは「補注」として別記したが、簡単な補強については原文に加筆して訳出した。アステリスクを付した脚注ならびに訳文中の [] 内は訳者による。翻訳出版は原著者の許諾済み。

** 本学名誉教授

(1) 本稿は、『スロバキアにおけるホロコースト研究の諸問題——方法論的・用語論的アプローチの起源——(Problématique výskumu holokaustu na Slovensku: genéza metodologických a terminologických prístupov)』(課題番号 VEGA SAV No. 2/0133/12–15) の研究成果の一部である。

号 (Pentscho)^{〔訳注1〕}に乘船した500人以上のために力を尽くし、ヨーロッパからの移住を決断した人々のビザ取得に奮闘したことで知られている。ハンガリーなどヨーロッパ各国に設置された「パレスチナ」中央事務所と協力関係にあった様々な機関の主だった支所は、ユダヤ人センター移民部長ギジ・フライシュマンの管轄下に置かれた(後述するように1942年3月に強制移送が始まると、社会部長を兼務するフライシュマンは収容所に送る物資と資金の調達に当たった)。ブダペストのパレスチナ事務所は、とくにブルガリア外務省から引き受けた移民にたいして通過ビザを発給した(1941年4月現在、ブルガリア政府が割り当てた移住許可証は400人分であったが、移民船の手配ができず、計画は頓挫した)。ビザの発給交渉は、部分的ながらトルコとシリアでも成功したが、通過証明書の円滑な発行手続を妨げる行政上の障害を取り除くために、ブラチスラバにもパレスチナ事務所の支所を開設する必要がある。移住への関心が高まったことから、ユダヤ人センターは、「スロバキア」中央経済局(Ústredný hospodársky úrad: ÚHÚ)にたいしてヘブライ移民支援保護協会(Hebrew Sheltering and Immigrant Aid Society: HICEM)の事務所を再び開所するよう要請した結果、そこが申請窓口になって、必要な手続きを担当することになった。この結果、政府がユダヤ人問題の解決のための抜本的な措置を執る前に、通行証明書と移民許可証を取得してスロバキアから進んで出国しようとした人は、数百人に及んだ。

1942年3月中旬、中央経済局長アウグス

ティン・モラーヴェク(Augustín Morávek)は、ドイツ人顧問官ディーター・ヴィスリチュニーとともにユダヤ人センターを訪問した。モラーヴェクからユダヤ人センター事務局長は、ユダヤ人のポーランドへの移送がすぐに始まるが、そこに居留地を建設し、働けるようになることと知らされた⁽²⁾。占領下のポーランドの強制収容所に向かって最初の移送列車がスロバキアを出国したとき、非合法組織「作業部会」の活動家たちは作戦を立てて、一番列車で移送された人々とこれから移送される人々の両方を救出することにした。それと併せて、迫り来る危険を察知してからというものの、「作業部会」は計り知れないほど強烈な精神的なプレッシャーをいっそう強く受けるようになったが、それでもそれを撥ねのけなければならなかった。ユダヤ人の中にいて「ユダヤ人にたいして不善を為す」有象無象の妨害活動家とも闘わなければならなかった。当面の優先課題は強制移送の停止であり、そのためにはスロバキア国内の労働収容所の運営資金を捻出する必要がある。労働収容所のほうが、強制移送よりはある程度ではあるが、安全であったからである。労働収容所のための資金調達が、ギジ・フライシュマンに課せられた任務であった。国際的な救援組織と連携した彼女は、ユダヤ人コミュニティの命運がかかっているとして、救援組織にたいして惜しまない資金援助を求めた⁽³⁾。

(2) Hradská, Katarína (ed.), *Holokaust na Slovensku 8. Ústredňa Židov (1940–1944). Dokumenty*, [Holocaust in Slovakia 8. Jewish Centre (1940–1944). Documents.] Bratislava: Dokumentačné stredisko holokaustu, [Holocaust Documentation Centre,] 2008, p. 33.

(3) 次を参照。Hradská, Katarína (ed.), *Holokaust na Slovensku 3. Listy G. Fleischmannovej. Snahy Pracovnej skupiny o záchranu slovenských aj európskych židov*, [Holocaust in Slovakia 3. Letters to G. Fleischmann. Efforts of the Working Group for the Rescue of Slovak and European Jews,] Bratislava: Dokumentačné stredisko holokaustu, 2003, p. 124.

〔訳注1〕 ブラチスラバ(スロバキア)を出港しドナウ川を下って、パレスチナに向かうユダヤ人男女青年500人を乗せたペンチョ号の物語が映画化されている(Pentscho: The Story of A Steamboat)。その予告編がYouTubeで公開されている(<https://www.pentscho.eu/>, accessed on August 20, 2022)。

1942年7月に「作業部会」は、[強制移送されて] ポーランドに収容されたスロバキアのユダヤ人が救いがたい状況下に置かれていることを、1942年3月末にルブリンに移送されたジリナ出身のディオニューズ・レーナルド(Dionýz Lénard)から聞いて知っていたということは、ありうることである。(ただし、これは仮説に過ぎない。)レーナルドはようやくの思いで私服を入手し隠れ場所を見つけ、好機を待ち収容所から脱走した。クラクフを経由して、ノヴィ・タルグ[クラクフの南約80^{キロ}]に到着し、そこからスロバキアに入国した。遅きに失したが、レーナルドがユダヤ人センターに持ち込んだ長文の報告文書には、とくにルブリン強制収容所の悲惨な状況が書かれている。その報告書は、大量殺人については言及していないが、スロバキアのユダヤ人が収容所で飢えと様々な病気に苦しんでいると書かれていたのである⁽⁴⁾。後になると、大量殺人にかんする情報を入手したにもかかわらず、一般ユダヤ人に強制移送の反対をさせないために、その情報が隠蔽^{いんぺい}されたと言われるようになった。この主張の真偽をめぐって、レーナルドの報告書が取り上げられ、ユダヤ人センターが実際に強制移送について知っていた事柄、強制移送について公表した事柄、うち続く悲劇を阻止するために執った行動などがあれこれ推し測られるようになった。

(4) 次を参照。Rothkirchen, Livia, *The Destruction of Slovak Jewry. A Documentary History*, Jerusalem: Yad Vashem, 1961, Document 76, pp. 166–204; Heim, Susanne, Ulrich Herbert, Michael Hollmann, Horst Möller, Gertrud Pickhan, Dieter Pohl, Simone Walther and Andreas Wirsching (eds.), *Die Verfolgung und Ermordung der europäischen Juden durch das nationalsozialistische Deutschland 1933–1945. Band 9. Polen: Generalgouvernement August 1941–1945*, München: Oldenbourg Verlag, 2014, Document 88, pp. 309–322.

レーナルドの脱走と報告書の執筆・提出との間には時間差があったため、レーナルドの証言は強制移送にたいするフライシュマンの対応に影響を与えるができなかった。このことは、フライシュマンが、スイスの国際救援組織レリコ(Relico)の代表幹事アブラハム・シルバーシャイン(Abraham Silberschein)に宛てた1942年6月27日付の書簡から明らかである。彼女は、3月25日から60本の移送列車がスロバキアを出発したと書いているからである。働ける者は労働センターに収容され、そこで重労働に服したが、彼らにかんする情報は入手できなかった。労働に適さない世帯員はルブリン県に強制移送された。「私たちが入手した情報から明らかになるのは、収容者の状況が悲劇的だということです」⁽⁵⁾。フライシュマンは、このような情報をスロバキアとポーランドの国境までの輸送に携わった鉄道員、食料などの闇屋、様々な国際機関とつながりがある外交官などから得て、ポーランドの状況を把握した。彼女の報告には、データや前後関係が正確でない箇所もあるが、スロバキアのユダヤ人の悲劇を伝える情報としては、最初のものの一つである。彼女はその報告書をまとめて、連合国側にたいしてスロバキアの労働収容所への資金援助を要請した。当時の彼女にとっては、それが優先事項であった。彼女は、労働収容所を維持するための外貨の獲得がかなり困難であることをよく知っていた。スロバキア国立銀行からの圧力が予想されたにもかかわらず、あえて彼女

(5) Hradská, Katarína (ed.), *Holokaust na Slovensku* 3, pp. 20ff. 次も参照。Národní archiv, Prague, Archiv Huberta Ripku, [National Archives, Prague, Hubert Ripka Archive,] 1-46-7-1, carton 178. [救援組織「レリコ」については、以下を参照。“Relief Committee for the Warstricken Jewish Population (RELICO),” by Yad Vashem, in: https://www.yadvashem.org/odot_pdf/Microsoft%20Word%20-%205816.pdf, accessed on August 20, 2022]

は次のような訴えと願いをスイスに送った。「外国のユダヤ人慈善団体は、労働に服している男女とその家族のための資金、ならびにユダヤ人病院や老人ホームを維持するための資金を、外貨で無償提供することになっています。当該外貨が送金されたスロバキア国立銀行は、その相当額をスロバキア・コルナでユダヤ人センターに支払う義務があります。このお金の送金先は封鎖口座ではなく、引き出し自由の口座だからです。」⁽⁶⁾ 彼女の構想は現実離れしていた。国際救援組織にできることはかなり狭められていて、多くの場合で明らかになったように、いかなる形態の援助であっても、それを実施するとなると、複雑で厄介だったからである。

強制移送開始後に「作業部会」が的を絞ったのは、もっぱらユダヤ人問題解決ドイツ人顧問官ディーター・ヴィスリチェニー（アイヒマン（Adolf Eichmann）の同僚で個人的な友人）であった⁽⁷⁾。「作業部会」はヴィスリチェニーを信頼し、彼のことをスロバキアのユダヤ人のために進んで一肌脱いでくれる人物と見て、スロバキアからだけでなく赴任した先々でも、強制移送中止を上司に口利きしてくれると考えたのである。ヴィスリチェニーは二つ返事で救い主の役割を引き受けた。「作業部会」の代表としてヴィスリチェニーと会ったフライシュマンは、ユダヤ人の救援にかんして考えるところを述べた。彼女は、ヴィスリチェニーの提案をほぼ丸ごと、しばしば疑うことなく鵜呑みにしたと言わざるを得ない。彼女は彼の提案に共鳴し、喜びのあまり雀躍としたからである。「作業部会」は

強制移送を中止する見返りとしてヴィスリチェニーに金を握らせることにすると、[いとこの] ヴァイスマンデル師（Michal Dov Weissmandel）が決めたとき、すかさずフライシュマンはこの提案を支持した。この「経済協力」は、「作業部会」による活動の特徴を言い当てる好個の事例である。彼らは、冷静さを欠き落ち着きを失い、恐怖と緊張の中にあって、少なからず子どもじみた行動を取り、抑制も修正もできなかったことがあった。一人のドイツ人顧問官の手を借りて強制移送を中止させようとしたことは、とくにフライシュマンが、この「我々を失望させるはずがない善良で信頼のおける連絡先」に、どれだけ強く頼りきっていたかを証明している。それだけでなく、この何とか掻き集めた虎の子（ほとんどが密かに持ち込まれた金銭）によってユダヤ人が救出されるのではなく、その実相は、ユダヤ人が売り物になっているのだということに（故意か、あるいは単に思いを巡らす時間がなかっただけなのかはともかくとして）「作業部会」の誰一人として気づく者がいなかったということも示している。

〔ドイツ人顧問官〕ヴィスリチェニーが「作業部会」の代表者に協力を約束したときの条件、およびそれに関連する複雑な事情については、今日ではよく知られているので、ここでは簡単に述べるにとどめよう。このドイツ人顧問官は、5万ドルでスロバキアのユダヤ人のために一肌脱ぎ、アイヒマンと話をしようとした。ヴィスリチェニーと「作業部会」との合意によれば、親善を名目として、3000人を乗せた3本の移送列車の出発を遅らせて、移送を10日間停止することになった。この期間の満了後、ドイツ人顧問官は合意額の半額を受け取るものとし、その後、さらに7週間、移送を停止した後、残金が支払われることになった。ドイツ人顧問官に支払う金銭は、どんなに逆立ちをしても合法的にスロバキアに届けることは不可能であった。

(6) Hradská, Katarína (ed.), *Holokaust na Slovensku* 3, Document 1, p. 24.

(7) より詳しくは、Hradská, Katarína, *Nemeckí poradcovia a židovská otázka na Slovensku. Prípady Wisliceny*, [German Advisers and the Jewish Question in Slovakia. The Wisliceny Case,] Bratislava: AEP, 1999, p. 133 を参照。

そのような輻輳した状況にあった1942年秋に、その金銭を密かに持ち込んだのは、ユダヤ人センターや「作業部会」が連絡を取り続けていたハンガリーの超正統派団体である。すべてが極秘裏に進められ、この企てを知っていたのは、ごくわずかだった。作戦上の理由から、企てが済んでからも秘密が守られ、戦術を練り支援を組織化した。スイスからブダペストへ、そしてイスタンブールに至るネットワークで結ばれた国際組織とブラチスラバの地下組織が繋がっていたことは、ほとんど気づかれなかった。

時を同じくして、収賄屋のヴィスリチュニーは強制移送の継続を画策し、それを1942年8月にヴォイテフ・トゥカ(Vojtech Tuka)に提案した。ここに、ヴィスリチュニーのずる賢い性格が現れている。明らかに「作業部会」はそれを見抜けずに、移送が短期間(1942年8月1日～9月18日)でも中断したことを成功とみなしていた。ところが、それは合意事項が履行されたからではなく、様々な事情が重なり合ってそうだったというのが、実相である。フライシュマンは事の深刻さを十分に理解することなく、協力的なあのドイツ人顧問官にいまだに頼りきっていた。中断後最初の移送列車が出る前日になっても、別の委託貨物(移送列車のこと)が9月18日に出発すること、さらにその4日後に別の列車(いずれもジリナ発)が出ることをスイスに知らせ、国際機関にたいしてポーランド向けの資金と物資の援助をフライシュマンは重ねて要請するほどであった。そのころ、彼女には、「シュリキム」⁽⁸⁾からこれまで以上

に信頼できる報告が届いた。それは、ポーランドの状況についての証言であり、強制移送されたユダヤ人の悲劇が取り返しの付かないところまで来ていることを確信させるものであった。運び屋が不快なニュースを運び、ポーランド総督府全域からユダヤ人が一掃されたこと、スロバキアのユダヤ人も大量殺人工場で犠牲になっていることなど、悲劇的事実を知らせたのである。結果が出ないことに、フライシュマンは絶望していった。次第に彼女は自分自身の想像力の犠牲者になっていった。スイス宛の書簡の文面は、ますます意気消沈したことを示し、絶望に満ちていた。

ラビのフリーダー師の日記によると、複数の運び屋はいろいろな残虐行為についても話し、遅ればせながらユダヤ人の新しい居留地となったベウゼツ^[訳注2]には、ガス殺の施設があるという情報を運んできた。第一波の強制移送が終わった後の1942年12月初めに、救援組織に送られた書簡によれば、「周到に計画されユダヤ人を組織的に大量に殺害する殺人工場にかんする情報がスロバキアに到達したこと」は間違いないとされている⁽⁹⁾。しかしながら、スロバキア系イスラエル人の歴史学者ギラ・ファトラノヴァーによれば、ビルケナウ収容所が絶滅収容所であることを「作業部会」が知ったのは、早くとも1943年9月であるが、ビルケナウの「殺人工場」のことを知った時期を正確に定めることは難し

[訳注2] Belzec. ルブリン(ポーランド)の南東約130^{km}。1942年3月にガスによる大量殺戮が行われた絶滅収容所。ソビボル強制収容所、トレ布林カ強制収容所とともに「ラインハルト作戦」に使用された。Cf. “Belzec,” by the United States Holocaust Memorial Museum, in: <https://encyclopedia.ushmm.org/content/en/article/belzec>, accessed on August 21, 2022.

(9) Rothkirchen, L., *The Destruction...*, Document 76, p. 194.

(10) Fatranová, Gila, *Boj o prežitie*, [The Fight for Survival,] Bratislava: SNM — Múzeum židovskej

(8) シュリキム(ヘブライ語の *Schlichim*)は使者、運び屋の謂。救援活動における重要な人脈を意味することもあった。外交特権を持つ大使館の職員であることもあった。そのため、彼らは秘密連絡員やスパイとして活動し、様々な場所を訪れ、報告書、書簡、金銭を運んだ。有力なユダヤ教正統派のグループとも連絡を取り合った。

いとされている⁽¹⁰⁾。フライシュマンは確かに手紙の中で、「ビルケナウの死亡率は高く、若者は飢えや病気のせいで、あるいは頻繁に暴力を受けて死亡しています。」と書いてはいるが、しかし、「暴力」なるものの詳細は特定されてはいない⁽¹¹⁾。こうして、「作業部会」は、労働するために移送されたユダヤ人がまだ生きてると信じ続け、その生活状況を改善するために金銭などの援助を提案したのであった。

第一波の強制移送で最後の移送列車が1942年10月に出発すると、「作業部会」は、スロバキアを出る移送列車が翌春までは一本も出ないことを知らされて、誰しもが安堵したが、ラビのヴァイスマンデル師は救援作戦を遅滞なく続けなければならない、と命じた。しかし、ブグ川沿いのベウゼツやソビボルに強制移送されたスロバキアのユダヤ人との再会が叶わないことが分かるや、救える者は誰でも救出しようということになった。そのために執られたのは、ユダヤ人をポーランドから安全な場所に逃がすこと、子どもたちを探して救出すること、生活環境改善のためにゲットーに送金すること、さらに金銭を密かに運び込んで、収容所の司令官や役人を買収することなどであった。

1943年半ばには、あのドイツ人顧問官[ヴィスリチェニー]は、ヒムラー(Heinrich Himmler)の命令によりギリシアに赴任したために、スロバキアにはもういなかったが、それでも「作業部会」は彼のことを最重要協力者(collaborators)の一人と見なしていた。[「作業部会」の一員で]建築家のアンドレイ・スタイナー(Andrej Steiner)も彼を信頼して、ポーランドから子どもたちを救い出す

手伝いをして欲しいとヴィスリチェニーに申し出た。ヴィスリチェニーは、それはできない話だと答えたが、その数週間後には、「ユダヤ人が、相当額のドルを調達しスロバキアからドイツへの送金を保証してくれる」なら、「子ども作戦」の実行は可能だと連絡してきたと言われている⁽¹²⁾。

フライシュマンとラビのヴァイスマンデル師は、ドイツに送金すべき資金と物資を外国で調達しようとした。しかし、アメリカの「ジョイント」などのユダヤ人救援組織は、「敵方に多額のドルを与えることは利敵行為である」ことを理由にして、これには協力しなかった⁽¹³⁾。ヴィスリチェニーは[「作業部会」の]スタイナーからこのことを聞かされていなかった。そのために、1000人の子どもをアウシュヴィッツからテレジン[テレジエンシュタット]に送り、さらにそこからスイス経由でパレスチナに送る予定を立てていたと言われている。だが、「作業部会」は要求金額を援助団体から受け取ることができなかった。そのために、ユダヤ人の子どもたちを乗せてテレジンに到着した移送列車はスイスではなく、方向を変えてアウシュヴィッツに逆戻りし、子どもたちはガス室へと直行してしまった。戦後になって、ヴィスリチェニーは証言の中で、自分はせっかくユダヤ人の子どもたちを救おうとしたのに、ユダヤ人(より正確に言えばユダヤ人の救援組織)がこの救出作戦を成功させるための資金を出し

kultúry, [SNM – The Museum of Jewish Culture,] 2007, p. 262.

(11) Hradská, Katarína (ed.), *Holokaust na Slovensku* 3, Document 10, p. 67.

(12) これは、アンドレイ・スタイナーの書簡からの引用(Yad Vashem Archives, Jerusalem M-5/131 収蔵)。この書簡の公開について、ジークフリート・スタイナー(Siegfried Steiner)にお礼申し上げる。

(13) *Ibid.* [ここに言う「ジョイント」とは、ユダヤ人の救援組織であり、正式名称は「アメリカ・ユダヤ人 合同 配給委員会」(American Jewish Joint Distribution Committee)であり、略称はJDC, Jointである。Cf. <https://www.jdc.org/>, accessed on October 7, 2022.]

惜しみしたと弁解している⁽¹⁴⁾。

以前に強制移送が中止されたのはヴィスリチェニーとの交渉によると考えたヴァイスマンデル師が下した結論は、賄賂が正しい解決策であることは証明済みなので、「作業部会」としては、これまでと同様に大胆な計画を立案しようというものであった。そのときになってもまだ楽観的に考えていたフライシュマンの頭の中にあったのは、残されたスロバキアのユダヤ人だけでなく、悲劇の犠牲となるはずのヨーロッパのユダヤ人のことである。ほとんど金銭的なことしか考えられていない、彼らのいわゆる「エウロパ計画」なるものは、確かによく練り上げられていた。そうであるにもかかわらず、実現されなかったことは、まさしくパラドックスである。それには、ユダヤ人救援組織が、まったく否定的な態度をとって、募金と資金提供を拒絶したという理由だけではなく、政治的な理由もあったのである。1943年9月、ヴィスリチェニーがフライシュマンに「その筋のお達しにより、エウロパ計画にかんする交渉の中止が決定された。」⁽¹⁵⁾と通告したとき、「作業部会」の対応は、ドイツ政府当局がいかなる確定債務〔支払先、支払期日、支払金額がすべて確定している債務〕も負わないというものであったと言われている。イスラエルの歴史学者リヴィ

ア・ロートキルヒェンは、ヴィスリチェニーのこの話を捏造として退けている。彼女によれば、「作業部会」が立てた最大規模の救出作戦の失敗には、別の、すなわち政治的・人的な背景があったとされている。(この場合はヒムラーに原因があった。)

フライシュマンたちは、困難な数週間を過ごしたために疲労困憊こんぱいはしているが、まだ力に残っていると思うと書き送った⁽¹⁶⁾。「作業部会」が重点を置いたのは、食料と医薬品の小包を強制収容所に郵送することであった。1943年5月中旬、フライシュマンには、援護局本部事務局と経済省から、強制移送されたユダヤ人のために個人宛小包を配送するプロジェクトが許可された。革靴以外の衣類(古着と下着)を梱包した重さ6kg以下の小包は、住所が分かっている人にしか送ることができず、1週間に郵送できる小包は100個程度であった。「再定住先」に居住する受取人は、対面で小包を受け取るようになっていた⁽¹⁷⁾。この取組により、1943年から44年までに、テレジンだけでなく、アウシュヴィッツ、ビルケナウ、マイダネクなどにも数千の小包が届けられた。ジャムやドライフルーツを入れた、いわゆる福祉小包も送られた。ジュネーブの赤十字本社からは、医薬品と一緒にコンデンスミルク110箱がスロバキアの労働収容所に事故なく届いた。フライシュマンがスイスに宛てた、ある手紙には、次のように書かれている。「終わることなく大量殺戮が続いていることを考えると、気が狂いそうになります。先週、運び屋が届けてくれた報告文書は、歴史的に見ても比類ない内容でした。どの友人とも、二度と再び会えるとは思っていません。衣服、医薬品、食品の小包

(14) また、このドイツ人顧問官は、この作戦が失敗したのは、アイヒマンと知り合いであったエルサレムのムフティがこの計画を頓挫させる決定を下したからだとも主張している。[ここに、the Mufti of Jerusalem とは Haj Amin al-Husseini (ハジ・アミン・アル=フセイニ) (1897年~1974年) のことである。ムフティについては次を参照。<https://www.jewishvirtuallibrary.org/haj-amin-al-husseini>; <https://www.jewishvirtuallibrary.org/haj-amin-al-husseini>; <https://www.young-diplomats.com/ten-things-you-need-to-know-about-the-mufti-of-jerusalem/>, accessed on August 21, 2022.]

(15) Hradská, Katarína, *Gizi Fleischmanová — návrat nežiadúci*, [Gizi Fleischmann – Return Unwanted,] Bratislava: Albert Marenčin: 2012, p. 139.

(16) Hradská, Katarína (ed.), *Holokaust na Slovensku* 3..., Document 6, p. 57.

(17) Hradská, Katarína (ed.), *Holokaust na Slovensku* 8..., Document 151, p. 316.

を送ってくださった由、お礼申し上げます。ユダヤ人自助会 (Jewish Social Self-Help) (本部はクラクフ——フラドゥスカー) からは、その贈り物が実際に届いたという通知はまだありません。』⁽¹⁸⁾ そのころまでに受取人のほとんどが殺されていたので、届いた小包はごく一部だというのが実相である。

当然のことながら、「作業部会」は、1944年3月にドイツ軍に占領された隣国ハンガリーの動向を注視していた。「私たちは皆、ハガルのような運命にある同胞に心を痛めています。それはそれは、とてもお気の毒で筆舌に尽くしがたいものでございます。』⁽¹⁹⁾ このため、1944年の夏以降になると、「作業部会」は、ブダペスト救援救済委員会 (Budapest Relief and Rescue Committee) (「作業部会」と同じくハンガリーの地下救援組織で通称「ヴァーダ (Vaadah l'ezra ve hacalah)」) に協力するようになった。スロバキアのユダヤ人にとって、ハンガリーが極めて重要であることは分かっていた。パレスチナ移民局が移民用の入国ビザを密かに持ち込むときに使う重要な機関の本部が、ブダペストには設置されていたからある。この機関のおかげでスロバキアのユダヤ人は、ごく少数ではあったが、新しい祖国パレスチナにたどり着くことができた。

頭が固いフライシュマンはそのときになってもまだ、アイヒマン分遣隊^{アイヒマンツグルッペ}の一員であるヴィスリチェニーがブダペストでも [スロ

バキアにいたときと] 同じように「助けてくれる」ものと考えていた。フライシュマンたちは、このドイツ人顧問官にたいして、最も信頼できるハンガリーのユダヤ人担当者の名簿を提供した。フライシュマンたちがこのドイツ人顧問官と接触することは、途轍もない冒険ではあったが、大きな希望でもあった。ユダヤ人地下組織のメンバーであるレソー・カストナー^[訳注3] (Reszö Kasztner) はブラチスラバを訪問して、フライシュマン、ヴァイスマンデル師、ユダヤ人センター事務局長ノイマンなど、「作業部会」のメンバーと面会して、援助と助言を受けた。状況が困難であったにもかかわらず、「作業部会」とハンガリー地下組織の繋がりには、当然と言えば当然であった。カストナーは、「作業部会」にたいしてハンガリーのユダヤ人の支援を依頼した。他方で、ブラチスラバのユダヤ人センターはカストナーにたいして、ドイツ軍と交渉するときには、スロバキアのユダヤ人の救済も念頭に置いて欲しいと頼んだ。親衛隊大尉マックス・グリュエゾン (Max Gruson) と一緒に、カストナーがブラチスラバに戻ってから、「作業部会」のメンバーはこのドイツ軍将校にたいして、上司と一緒にになってスロバキアのユダヤ人のために一肌脱いでくれませんかと頼んだが、そのときは、すでにスロバキア国民蜂起が勃発する直前であったために、遅きに失した [蜂起の勃発は1944年8月]。とくに1944年夏にスロバキアがドイツ

(18) Hradská, Katarína (ed.), *Holokaust na Slovensku 3...*, Document 28, p. 114.

(19) 1944年5月17日付 フライシュマン発 N. シュヴァルベ (Schwalbe) 宛書簡, Hradská, Katarína (ed.), *Holokaust na Slovensku 3...*, Document 26, p. 109 所載。[ハガル (Hagar) は、アブラハムとサラの女奴隷で、イシュマエルの母として『旧約聖書』(創世記 16 章, 21 章) に登場し、虐待、追放、忍耐を象徴する。ハガルの運命はイスラエルの民の運命に重ねられる。ここでは、強制移送された同胞がハガルにたとえられている。]

[訳注 3] Rudolf Kasztner とも。ハンガリーの救援組織 Vaada (ヴァーダ) の一員。1906 年～1957 年。ハンガリーのユダヤ人とトラックなどの軍需品と交換するために、親衛隊幹部 (アイヒマンとヴィスリチェニー) と交渉し、1944 年 12 月までにスイスにユダヤ人 1686 人を送ったことで知られている。Cf. “Rudolf (Reszö) Kasztner,” in: *Holocaust Encyclopedia*, <https://encyclopedia.ushmm.org/content/en/article/rudolf-rezsoe-kastner>, accessed on January 30, 2023.

軍に占領されてからは、どのような救済作戦も実現しそうになかった。「ユダヤ人を助けたいならば、自分の命をかけて大量殺戮者と交渉しなければならない」⁽²⁰⁾ というのは当時の鉄則であったが、その交渉には金銭が絡んでいた。このような事情は、全期間を通じてまったく変わることがなかった。

1944年9月末にフライシュマンがスイスに送った最後の書簡は、まるで暗闇の中にいる者が発する絶望的な叫びのようであった。彼女は、強制移送が再び始まる危険性に注意を促し、間接的にではあったが初めて、上は政府首脳から下は墮落した高官にいたるまで、スロバキアのユダヤ人たちの運命に責任を負う者が誰なのかを並べ上げた。しかし、ヴィスリチュニーの名前は出していない。全幅の信頼を置いていた人に裏切られたとは思っても

よらなかったのである。

本稿は、「作業部会」の中心メンバーであり、救援活動の組織とその活動を担ったギジ・フライシュマンに焦点を当てた。彼女は、自分の命の価値よりも、最も必要としている人々を助けるという責任感のほうに重きを置いた人であった。しかし、彼女を美化することはできない。それと同時に、スロバキアのユダヤ人の運命を掌中に収めた最良のパートナーを信頼するあまり、その信念の犠牲者になってしまうことが理解できなかった人物だと決めつけて、彼女を批判することもできない。スロバキアのユダヤ人を救おうとすれば、ドイツ人顧問官に協力を求めなければならなかった。現在と未来への緊張と恐怖の中では、それ以上のことはできなかったのであろう^{〔訳注4〕}。

(20) Löb, Ladislaus, *Geschäfte mit dem Teufel. Die Tragödie des Judenretters Reszō Kasztner. Bericht eines überlebenden*, Köln und Wien: Böhlau, 2010, p. 263.

〔訳注4〕ギジ・フライシュマン（1897年～1944年）は、スロバキア国民蜂起が鎮圧された後、1944年秋の大量移送により、アウシュヴィッツに送られ、到着直後に殺害された。この訳文に付けた「付録 カタリーナ・メシュコヴァ・フラツカ著 ギジ・フライシュマンとスロバキア・ユダヤ人の強制移送」参照。

文 献 等

文書館

Národní archiv, Prague, Czech Republic [National Archives in Praha, Czech Republic]

Yad Vashem Archives, Jerusalem, Israel

参考文献

Fatranová, Gila, *Boj o prežitie*, [The Fight for Survival,] Bratislava: SNM — Múzeum židovskej kultúry, 2007.

Friedrich, Klaus-Peter (ed.), *Die Verfolgung und Ermordung der europäischen Juden durch das nationalsozialistische Deutschland 1933–1945. Bd. 9. Polen: Generalgouvernement. August 1941–1945*, Mnichov: Oldenburg Verlag, 2014.

Heim, Susanne, Ulrich Herbert, Michael Hollmann, Horst Möller, Gertrud Pickhan, Dieter Pohl, Simone Walther and Andreas Wirsching (eds.), *Die Verfolgung und Ermordung der europäischen Juden durch das nationalsozialistische Deutschland 1933–1945. Band 9. Polen: Generalgouvernement August 1941–1945*. Munich: Oldenbourg Verlag, 2014.

Hradská, Katarína (ed.), *Holokaust na Slovensku 3. Listy G. Fleischmannovej. Snahy Pracovnej skupiny o záchranu slovenských aj európskych židov. Dokumenty*, [Holocaust in Slovakia 3. Letters to G. Fleischmann. Efforts of the Working Group for the Rescue of Slovak and European Jews. Documents,] Bratislava: Dokumentačné stredisko holokaustu, 2003.

Hradská, Katarína (ed.), *Holokaust na Slovensku 8. Ústredňa Židov (1940–1944)*, [Holocaust in Slovakia 8. Central Office of the Jews (1940–1944),] Bratislava: Dokumentačné stredisko holokaustu, 2008.

Hradská, Katarína, *Gizi Fleischmanová — návrat nežiadúci*, [Gizi Fleischmann – Return Unwanted,] Bratislava: Albert Marenčin, 2012.

Hradská, Katarína, *Nemeckí poradcovia a židovská otázka na Slovensku. Prípady Wisliceny*, [German Advisers and the Jewish question in Slovakia. The Wisliceny Case,] Bratislava: AEP, 1999.

Löb, Ladislaus, *Geschäfte mit dem Teufel. Die Tragödie des Judenretters Reszō Kasztner. Bericht eines überlebenden.*, Köln und Wien: Böhlau, 2010.

Rothkirchen, Livia. *The Destruction of Slovak Jewry. A Documentary History*, Jerusalem: Yad Vashem, 1961.

付録 ギジ・フライシュマンとスロバキア・ユダヤ人の強制移送*

カタリーナ・メシュコヴァ・フラツカ
木 村 和 範 (訳)

ユダヤ人にかんするすべては忘却の彼方になってしまった。スロバキア・ユダヤ人の指導的人物であったギジ・フライシュマン(Gigi Fleischmann)についても、同様である。ユダヤ人は、ドイツ・ナチズムと生死を共にしていたスロバキアの聖職者ファシスト政権によって殺害されるばかりか、生き残った者は共産主義の下で罵倒され、社会からはじき出された。

ユダヤ人を代表する最高のユダヤ人機関[ユダヤ人センター]は、ホロコーストの時代にあってファシストに支配され峻烈をきわめた権力と対峙したが、ギジ・フライシュマンは、その役職者の中でも尋常ならざる地位にあった。このユダヤ人センターは、ユダヤ人に自己実現の場を提供していたが、具体

的には、強制移送の遅延・阻止やガス殺からの救出に当たっていた。それはヨーロッパの人たちから見れば考えられないような出来事であったが、スロバキアでも、決して当たり前ではなかったのである。

ホロコースト時代のスロバキア社会では、ユダヤ人への向きあい方は非常にはっきりしていた。とくに、ヒトラーとその反ユダヤ政策に与したスロバキア大統領などの最高権力の座にあった政治家はそうであった。スロバキア社会の敵と見なされたユダヤ人が経済力を一手に握っていたこともあって、一般大衆の中にも、ユダヤ人コミュニティを拒絶した者がいた。ユダヤ資本に代わってスロバキア資本を優位な位置に立たせるために、ユダヤ人をスロバキアから追放することによってユダヤ人問題を解決しようとする人もいたのである。この要因の一つとしては、ドイツの衛星国としてのスロバキアでは、カトリック色が強かったということがある。カトリックの聖職者であった大統領は、あらゆるユダヤ的なものを否定すると主張し、社会的、経済的、文化的生活からのユダヤ人の排除をあからさまに要求した。大統領による発言と権威がスロバキア国民に影響を与え、ユダヤ人問題の抜本的解決(ポーランドの強制収容所へのユダヤ人の移送)については、社会のマジョリティから了承が得られたのである。この文脈で強調しなければならないのは、第一波の強制移送のときには、国民のマジョリティは、ポーランドで何が起きているかを知らな

*この論稿の原題は Die Aktivität von Gigi Fleischmann während der Deportationen der slowakischen Juden であり、2012年5月15日にブダペスト(ハンガリー)のホロコースト記念センター(Holocaust Memorial Center: HMC [<https://hdke.hu/en/>])で開催された「国際会議『否と言うことができる』」(International conference “It is possible to say No”)での報告原稿である。出版にあたり著者の許諾を得た。なお、前掲した論文に引用されているように(脚注15)、フラツカにはフライシュマンにかんする著作がある(Katarína Mešková Hradská, Gigi Fleischmanová – návrat nežiadúci, [Gigi Fleischmann – Return Unwanted,] Bratislava: Albert Marenčin, 2012)。その副題(návrat nežiadúci [Return Unwanted, Rückkehr unerwünscht (帰還好ましからざる人物)])の意味については、本文参照。

かったし、ユダヤ人がガス殺されていることも知らなかったということである。

そうは言うものの、影響力が最も大きかったユダヤ人組織の代表とか大統領を含む国権の最高責任者が、どのような情報を持っていたかは別の問題である。最初の移送列車がスロバキアの領土を離れたところに、ユダヤ人センターの中に非合法組織（「作業部会」）が結成された。この誕生は、ユダヤ人センターの動向と密接に関係している。ユダヤ人センターは決してスロバキアのユダヤ人を救済するための組織ではなく、またユダヤ人の利害とニーズを代弁するものでもなかったからである。いくつかの理由から、ユダヤ人センターの活動は肯定的に評価することはできない。最も重要なことの一つは、ユダヤ人センターのスタッフが、善行より以上に、もっと多くの悪事を働くお役人で構成されていたということである。その一方で、ユダヤ人センターには、迫害の目に遭っている人々を捨て身で助けることに意味を見いだすメンバーもいた（フライシュマンなどがそうであった）。その他のメンバーは命令に盲従し、そのためには何でもできる人たちだった（たとえば、ユダヤ人の強制移送を準備する特任部の責任者カロール・ホッホベルク（Karol Hochberg）がそうである）。とくにフライシュマンとホッホベルクという二人の人物は、ユダヤ人コミュニティの中での役割と道徳崩壊という根底的な問いかけにたいして多くの答えを与えてくれる。

「作業部会」の目標（ユダヤ人の強制移送を停止もしくは遅延させてガス室での絶滅を防止すること）のために、フライシュマンはドイツのユダヤ人問題顧問官ディーター・ヴィスリチェニー（Dieter Wisliceny）との協同（kooperieren）を余儀なくされた。これ（経済的に言えば賄賂の支払）がなければ、スロバキアなどのヨーロッパ諸国のユダヤ人を救出するチャンスはなかったであろう。

ホッホベルクは、ユダヤ人迫害でヴィスリチェニーと手を携えて協働したが（zusammenarbeiten）、それは別の理由からである。裏切り者のホッホベルクは、進んでヴィスリチェニーに手を貸し、反ユダヤ措置の地固めに邁進することによって、我慢のならないやり口で協同（kooperieren）した者たちの象徴的存在となったのである。このような観点からすれば、フライシュマンとホッホベルクは、ドイツの顧問官とどのような協同（Kooperation）・協力（Kollaboration）の関係にあったのが問題となる。協同は強制により、協力は自発によるものか。逆に、協同は自発的なもので、協力は強制によるものなのか。協同と協力は、それぞれどのような結果をもたらすのか。

このことに関連して、次のことは強調しておかなければならない。「作業部会」の幹部であったフライシュマンの任務は、スイスの「レリコ（Relico）」とアメリカの「ジョイント（Joint）」（いずれも救援組織）と連絡を取ることであった。彼女は、スロバキアの労働収容所に送る物資だけでなく、ヴィスリチェニーへの賄賂に充てる資金をも調達したと言われている。当時、フライシュマンはエネルギーに満ちあふれていて、助けてくれそうな人はいないかと絶えず探していた。「ジョイント」に宛てた彼女の書簡からは楽観主義が窺われるが、それは彼女の同僚たちにも伝わっていた。彼女は金銭に力があることは分かっていたが、ドイツ人顧問官ヴィスリチェニーがユダヤ人を実入りの多い金ヅルと見ていることは、予想だにできなかった、と言うよりは思ってもみなかった。有り体に言えば、この男は空手形を振ったのである。フライシュマンだけでなく他の「作業部会」のメンバーもまた、ヴィスリチェニーを買収してユダヤ人を解放するために袖の下を渡した、というかヴィスリチェニーにユダヤ人を売り

払ったのである。

しかし、フライシュマンの楽観主義は、彼女の悲劇的な運命の始まりでもあった。奮闘むなしく、彼女は自分の無力さに打ちひしがれ、親衛隊保安部 (Sicherheitsdienst: SD) から搜索されたあげくに、転々と所をかえて収監された。仲間が何度も救出しようとしたが、遅きに失した。スロバキアがドイツ軍に占領された 1944 年 9 月ころ^[訳注]、アイヒマン (Adolf Eichmann) 子飼いのアロイス・ブルンナー (Alois Brunner) がブラチスラバに赴任して、ユダヤ人問題の抜本的解決に着手したからである。フライシュマンは、ブルンナーとの協働 (Zusammenarbeit) を拒否した。ブルンナーが赴任して、「作業部会」は活動を停止し、メンバーは逮捕後、セレジの強制収容所に連行され、そこからアウシュビッツに強制移送された。ブルンナーは、強制移送の書類に書かれたフライシュマンの名前に R. U. の 2 文字を記入した。R. U. とは、Rückkehr unerwünscht (帰還好ましくない人物) という意味である。その結果、フライシュマンはアウシュビッツに到着直後に殺害された。

彼女の書簡からは、まだ救える人は救おうとしたことが分かる。「ジョイント」宛の書簡からは、異常なまでに訴える力が伝わってくる。フライシュマンだけでなく、「作業部会」のメンバーもまた、際だった生き方をしていた。性急、敏速、苦勞、悩み、驚き、劇的な展開、途方もない希望、そしてそれ以上に大きな失望の中を生きていた。この書簡は、フライシュマンがドイツのユダヤ人問題顧問官への「協力 (Kollaboration)」を示す証拠ともなっている。彼女は、スイスの救援組織で対応に当たったナタン・シュワルプ (Nathan

Schwalb) とサリー・マイヤー (Saly Mayer) にたいして、スロバキアのユダヤ人がヴィスリチェニーに託した希望を執拗なまでに書簡にして書き送った。そのような書簡の中のある一通は、スロバキアからの最初の強制移送が始まって 3 ヶ月が経過した 1942 年 6 月 27 日に書かれ、ポーランドに連行されたスロバキアのユダヤ人数千人がもはやこの世の人ではないとある。この書簡は、スロバキアのユダヤ人の悲劇を描いた最初の文書の一つであり、そこに書かれている悲劇は、カトリック教会が確固たる地歩を築いていた国にして、ユダヤ人市民をヒトラー・ドイツに初めて引き渡した国でもあったスロバキアの社会では、モラルが崩壊していたことを如実に物語っている。この国は、自前の暴力装置 ([フリンカ・スロバキア人民党の] 準軍事組織フリンカ警固団) を用いてユダヤ人を東方に追放し、ユダヤ人一人につき 500 ライヒスマルクを第三帝国に支払ったのである。

フライシュマンの書簡は、内容から見ても書かれた状況から見ても、他と比べものがないほどユニークである。フライシュマンは、スロバキアはもとより、とくにハンガリーでも、まだ救える人は救おうとした。その並々ならぬ奮闘ぶりを最もよく記録しているのが、まさしくこの書簡である。この際、私はそのことを強調しておかなければならない。私たちはそこからすべてを学びとるならば、それを下地にして当時のユダヤ人コミュニティでの生活を写すモザイク画が浮かび上がることであろう。フライシュマンは、ドイツ高官である顧問官との間で「経済ベース」の関係を大切にして、協働 (Zusammenarbeit) したから、頑張ることができた。このとき投げかけられるのは、フライシュマンがドイツ人に協力したのか (kollaborieren)、あるいはとくに作戦上協働したのか (operativ zusammenarbeiten) という疑問である。手短に言えば、彼女も目的達成のために女の武器を使ったの

[訳注] 1944 年 8 月に反独蜂起 (スロバキア国民蜂起) が勃発し、それが鎮圧されて、スロバキアはドイツに占領された。

か。書面上は、そのようなことを匂わせるような痕跡はない。フライシュマンがヴィスリチュニーを誘惑したのか、それともあらゆる機会を利用して女性として彼を喜ばせたのか。どのような憶測も可能であろうが、あれこれの詮索は、されるがままにしておこう。ただし、フライシュマンが非常に好感の持てる人物であり、女性として引きつけるものがあり、その上、とても知性的であったことを示す証拠がある。この組合せが、彼女を助けたことは数多くあるが、不運を招いたこともあった。

ギジ・フライシュマンの物語は、ホロコースト史の研究者にたいして、スロバキアの人々が強制移送について何を知り、何を知らなかったのか、あるいはまたユダヤ人は、強制移送のことをどのようにして知ったのかという、今日でも最も重要な疑問を問いかけてやまない。高い立場にあったユダヤ人の代表者たちは、強制移送についてとても確度の高い情報を掴んでいたというのが、実相であって、問題は、これらの幹部が迫り来る危険の前にして何をしたのか、逆に何をしなかったかということである。フライシュマンはドイツ権力に協力して（kollaborieren）分け前を得ようとしたのであって、スロバキア・ユダヤ人をはじめとするヨーロッパ・ユダヤ人をガス室から救おうとしたのはただそれだけのためだったという主張は、すこぶる根拠が薄弱であって、まっとうな歴史学者であれば、一顧だにしないような見解である。自発的な協働（Freiwillige Zusammenarbeit）[協同

（Kooperation）]と強制された協力（aufgezwungene Kollaboration）という劈頭で述べた言葉を、ここでもう一度繰り返しておきたい。フライシュマンは進んで虎穴に入り、その結果、みずからの命という最も貴重なものを犠牲にした。しかし、彼女は自分の命以上に大切なものを失ってしまったのではないと思う。フライシュマンは、二人のかけがえのない我が娘を手放さなければならなかったからである。覚めた目で現実を見つめていたユダヤ人であれば誰にでも、あの状況の行方がはっきりと分かっていた戦前に、彼女は我が子をパレスチナに送った。フライシュマンが救ったのは自分の娘たちだけでなかった。何千人もの子どもを救うために、そうしたのである。彼女は我が子に会うことは二度と再び叶わなかった。

ギジ・フライシュマンは、強制移送からの救出を可能にする状況を作り出そうとした人物として、ホロコーストの歴史の中で永遠にその名を留めている。彼女が築いた国際的な救援組織とのつながりによって、それがはじめて可能になった。ユダヤ人担当のドイツ顧問官との協同（Kooperation）（声を大にして「協力（Kollaboration）」ではないと言いたい。）こそが、そのための唯一の手段であった。とは言え、人命救出の闘争をまっとうすることなく、おのれの無力さの犠牲になったギジ・フライシュマンは、事の成り行きをどの程度まで分かっていたのであろうかという疑問は残る。